
篠ノ之家の長男は正義の味方

雅太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

篠ノ家の長男は正義の味方

【Nコード】

N8449X

【作者名】

雅太郎

【あらすじ】

封印指定をされてしまい、魔術師との連戦で命をおとししまった衛宮士郎。しかし、気が付くと彼は赤ん坊となってしまうていた！？

これは、Fateの衛宮士郎がISの篠ノ家の長男として、第2の生を受けた物語である。

*この物語は、基本作者である私の妄想の塊です。また、不定期になる可能性もあります。

プロローグ（前書き）

どうも雅太郎です。

前々から、考えていたIS×Fateのクロスオーバー物です。
駄文ですが、楽しんでいただければ幸いです。

ブローグ

I am the bone of my sword .

Steel is my body , and fire is
my blood .

I have created over a thousand
blades .

Unknown to Death . Nor known to
Life .

Have withstood pain to create
many weapons .

Yet , those hands will never ho
ld anything .

So as I pray , unlimited blade
works .

赤い。どこまでも赤い夕日の中、一人の青年がいた。

力なく倒れる青年の体にはいたる所から血が流れている。

それもそのはずだ。青年、衛宮^{えみや} 士郎^{しろう}は魔術協会から封印指定を指定されてしまい、何度も魔術師との戦闘を行ってきていたのだ。そのせいで、士郎はろくに食事も休息も取れず、体力は限界となつてしまいここまで傷ついてしまったのだ。

衛宮士郎の傷は、既に致命傷の域にまで達してしまっている。

この場には治療用の道具も無く、町や村なんかも近くに無い為、助かる事は不可能だろう。

それでも、彼は笑っていた。

何よりも大切な…10を切り捨ててでも守りたい1を守ることが出来たからだ。

衛宮士郎は、最後の最後まで笑い……そして、死んだ。

大雨の中、病院の前に一人の赤ん坊が捨てられていた。

たまたま、病院から出てきた一人の男がその赤ん坊に気付き、その子を抱き上げた。

その赤ん坊には、紐を通してある小さなカードが首にかけてあり、そのカードには二文字の漢字…恐らく、この赤ん坊の名前が書いてあった。
- - - - -

- - - - -『士郎』と。

第1話

「pipipipipipi!」

目覚ましの音で、少年の目が覚めた。

少年は、目覚ましのアラームをOFFへと切り替えると、何時も通り少し離れたところで、こちらに背を向けて寝ている少女を起こさないように着替えを済ませる。

そして、脱いだパジャマを持ち、部屋から出て行き洗面所へと向かう。

洗面所に付いたら、洗濯籠へとパジャマを入れてから顔を洗う。

洗い終わったら、キッチンへ行き、朝食を作っている母へと挨拶をする。

「おはよう、母さん」

「うん。おはよう、士郎くん」

少年の名は、士郎。衛宮士郎の生まれ変わりである、篠ノ之^{しのの}士郎だ。

side out

side 士郎

俺が生まれ変わってから、早6年が経過していた。

何故生まれ変わる事ができたのかは、わかっていない。けれど、せっかくの第二の人生だ。^{セカンド・ライフ}できるだけ、危険な行為は止めておこう。

この篠ノ之家は、4人家族で、俺には双子の妹がいる。……まあ、その子には、少し問題があるけどな。

俺は何時も通り、母さん・篠ノ乃 春香さんはるかの手伝い…と、言ってもまだ6歳だ。食器の配膳ですら、無理言って行っているだけだけどな。

春香さんは、結構なお調子者らしくよく父さんと遊んでいる。けど、料理がうまく俺ですら負けるかもしれないほどの腕前だ。

「ガチャ」

「おはよう、春香。お？相変わらず早いね、士郎くん」

「おはよう、あなた」 「おはよう、父さん」

この人は、篠ノ之 柳韻しゅういんさんだ。

柳韻さんは、一家の大黒柱で、篠ノ之道場の師範もやっているらしい。

柳韻さんは…なんと言うか、じいさん（衛宮 切嗣）みたいな人だ。普段は大雑把で抜けてるところがあるんだが、剣道になると人が変わり、常に冷静で容赦が無くなる。

さて、柳韻さんも来て、朝食の準備も終わっている。さて…時間的にそろそろ、アイツが来る頃か。

「ガチャ」

「……………」

「「えっと…おはよう、束」」

「……………」 おはよう」

入ってきたのは、俺の双子の妹の篠ノ之 束たねだ。

不機嫌そうな顔をしながら、春香さんから受け継いだピンク色の髪を揺らしている。

束は、人が嫌いなのか興味が無いのか、殆どの人に対して話しかけ

られても無視している。

例外なのは、家族と親友の織斑おりむらくらいだ。ちなみに、俺はというと

「おはよう、束」

「……………（プイ）」

無視される…しかも、顔まであからさまに逸らされる。

何故か知らないけど、束は俺のことが気に入らないらしい。すこし、凹む。

それでも、家族なんだから仲良くしたいんだけどな。

束も席に着いたことだし、みんなで声をあげる。

「「「いただきます」「」「……………」

約1名、何時も通り空気を読まず、そして食材に感謝しない不届き物がいた。

俺は、その不届き物が箸を掴む前に取り上げる。

「……………返して」

「食べる前に言う事があるだろ？ちゃんと言ったら、返してやるさ」

「……………いただきます」

「…よろしい」

結構な間（約三点リーダー10個分くらい）の後に、ちゃんと「いただきます」と言ったので箸を返してやった。

ちなみに、柳韻さんと春香さんは何時も通りニコニコと笑って此方を見ていた。

それからは、談笑しながら朝食を取っていたけど、束はあれ以降ずっと無言だった。

今日は休日だから、幼稚園は休みなのでランニングに出かける。
俺は普段から、体や魔術回路（ちなみに本数は前世と変わらず27本だ）は鍛えている。

何時、何が起きてもいいように。力は持っておいたほうがいいからな。

力がなければ、あんな地獄が起きたら、誰一人助けられないからな
思い出すのは、前世の記憶。何年もの月日が立ち、色褪せていった
がそれでも忘れられないあの地獄を。

ちようど、いつも休憩場所になっている公園にたどり着く。

ん？あそこにいるのは、束と織斑か。

束はパソコンをやつてて、織斑がそれを見てるな…って、何時束の
奴はパソコンを持ったんだ？

柳韻さんや春香さんは、買ってやって無かったよな？

なんで持つてるのさ…

さて、束が気付くと機嫌が悪くなるからその前に行くとするか。

ランニングを終えると、春香さんの手伝いをする。

と言つても、簡単に洗濯物を畳むくらいだけだな。未だに、背が小
さすぎるからそれ以外何も出来ないから早く成長したい。

それから、昼が出来たから道場にいる父さんを呼びに行く。

一応、道場はあるけど門下生は一人もいないんだよな。

それでも、柳韻さんは代々受け継がれてるあの道場には、思い入れ
があるみたいで毎日使っている。

近々、織斑が入門するみたいだから余計に張り切ってたな。

「父さん、昼食が出来たよ」

「ん、ああ、士郎くん。ありがとう、直ぐに行くよ」

「ああ。早く来てくれよ、父さん」

柳韻さんと別れて、俺はリビングへと向かう。

リビングに戻ると、既に束は戻っていた。

それから、柳韻さんも来て、みんなで昼食を食べた。

「まあ、朝と同じでまた「いただきます」を言わなかったから、強制的に言わせたけどな！」

side out

side 束

朝、私が起きると何時も通りアイツはもう起きてるみたいだ。私は、何時も通り着替えはまだせずにパジャマのままリビングへ向かった。リビングにはお父さんとお母さん、そして……アイツがいた。

私は、アイツ……兄である、土郎のことが嫌いだ。私は、自分が天才だと思っている。親友のちーちゃんはまだ漢字も数学も出来ないけど、私は出来た。お父さんもお母さんも「天才だ！」って褒めてくれて嬉しかった。……でも、天才だからかな？ちーちゃんとアイツ以外が、とつても子供っぽくて、馬鹿っぽくて……話そうとも思えなかった。そんな私でも、子供だと……普通の子供だと思える所がある。それは、お父さんとお母さんに甘えたいっていう、願望が私の中にあったんだ。親の愛情が欲しいって……でも、私はそれを手に入れ無かった。お父さんもお母さんも、私よりもアイツを……土郎をかまってる！許せなかった、お父さんとお母さんの愛情を奪ったアイツが！だから、私は……篠ノ之 土郎が大っ嫌いだ！

第1話（後書き）

すみません…以前は、柳韻さんをオリキャラ化させてたので、その名残が残ってました…

そして、単純なミスでした…まさか、篠ノ之の最後の【の】の字を間違えるとは…

第2話（前書き）

これで、幼稚園編は終わりです。

第2話

休日が過ぎ、月曜日となった。

俺としては、平日は憂鬱だ…俺は見た目は子供だが、中身は大人だ。そんな俺が、幼稚園に行くのははつきり言ってキツイ。

子供にまぎれて、さらに出来るだけ違和感無いようしくちゃいけないから…

はあ…どんなに愚痴っても、意味は無いしな…何時も通りに過ごすしか無いか…

「篠ノ之くくん、今日はストーブ見てもらえないかな？」

「あ、はい」

*士郎は、高校の頃の癖でつつい壊れた扇風機を見て直してから、先生方からは色々と修理を頼まれているのだった。既に、束同様先

生方からはある意味厄介な人物に認定されているのだった。（大人び過ぎているせいで）

幼稚園が終わると、俺はストープ3台置かれてあるホールに連れて行かれる。そして、俺は直ぐに解析の魔術をバレないように使用し、ストープの状態を調べる。

（ふむ…基盤が一部壊れてるな…これなら基盤を変えるだけで直りそうだな）

先生が見てる中、マイナスドライバを持ち、ストープの解体を行なう。できるだけ、直ぐに直せるように順番に解体していく。そして、壊れている基盤の付いている銅線をペンチで切り、抜き取る。

その後、別のストープを解体する。こっちは、別に基盤が壊れているから、さっき取った基盤と同じ基盤を切り取り、さっきのストープに半田を使って接着する。これで、このストープも直った筈だ。念のため、もう一度解析の魔術で見てみるがちゃんと直ってるようだ。

「先生、これで直ったはずですので持って行ってください」

「あ…ありがとね、篠ノ之君」

先生が、ストープを持って退出するのを見送る。さて、これでいいだろう。

トレース・オン
「投影開始」

投影魔術を行い、壊れている基盤の治っている状態の基盤を投影する。これなら、別の所からもってこなくてもちゃんとストープを直せる。さっきまでは、先生がいたから投影魔術が使えなかったんだよな。

2台分、全ての基盤を投影する。そして、その基盤をストープに半田していく。ふう、これで全部か…

「篠ノ之君、どうか？」

「あ、全部修理し終わってますよ」

「ええ！？ぜ、全部直っちゃったの！？さすが、篠ノ之君！！」

先生からの賞賛を受け、俺はこれで帰宅する事になる。今日は、いつもより遅くなったな…

束は既に幼稚園にはいないみたいだし、そのまま家に帰るか…

「おい、おりむら！テメエ、なににらんでんだよ！」

「いたい！やめてよ〜！」

よく俺がランニングの途中で休憩する公園で、一人の女の子を取り囲むように何人かの男子がいた。

あれは…織斑？周りにいるには、別のクラスの男子達か…確かに、織斑の眼つきは他の子と比べて鋭い方だが、苛めは良くないと思うんだがな…

さて、どう助けるか…やり過ぎれば、柳韻たちに迷惑がかかるからな…そうだ、アレを使うか！

俺は、ある物を投影し織斑を助けに行く。

「おい、お前等何やってんだよ」

「だれだよ、おまえはっ！」

「た、たばねちゃんのおにいさん…？」

「あーっ！おまえは、しののののあにじゃねえか！おまえ、すこしはしのののをどうにかしやがれ！」

いや…束をどうにかするのは、俺も柳韻さんたちでも無理だからな…出来るとしたら、織斑くらいじゃないのか？

「それに関してはすまない。だが、織斑を苛めるのは良くないと思うぞ?」

「うっせえ！おまえら、やっちまえ！」

いつせいに俺に襲い掛かってくる男子達。やれやれ、血の気の早いことだ。

俺は、さっき投影したアレで男子たちの頭を叩く。

—
—
—
スパパパパン

[illegible]

俺が投影したのは、冬樹の虎愛用の『虎竹刀』だ。簡単に言えば、竹刀の先端に虎のストラップがついている。だけど、これで叩かれると何故か痛みはあるが、タンコブ一つ出来ないと言つ優れものだ。これなら、どれだけやっても親にはバレはしないだろう。

「さて、やるってんなら相手になるさ。どうする？」

「くっそ……おぼえてやがれよ……!!」

たった一撃叩き込んだだけで逃げだす男子達……弱すぎじゃないか？

「はあ……大丈夫だったか、織斑？」

「う、うん……ありがとう、たばねちゃんのおにいさん……」

「いや、別にいいさ。これから気を付けろよ?」

俺は、それだけを残し帰宅をした。

Side out

きょうは、たばねちゃんがはやくうちにかえってじぶんがつくったっていう『ばそこん』をかいぞうしたいからってはやくかつちやいました。わたしは、きょうはひとりでこうえんであそぶことにしました。

ほんとうは、ほかのこたちともあそびたいんだけど、わたしのめがこわくてだれも近づいてきてくれないんです。それでも、たばねちゃんやたばねちゃんのおにいさんだけは、わたしのめのことをきにせずにはなしかけてくれます。

「あ！みるよ、おりむらのやつがひとりであそんでるぜ！」

「ほんとだほんとだ！」

きづくと、わたしのちかくにおとこのこたちがいました。

たしか…べつのくらすのおとこのだったよね？

いつもは、たばねちゃんがおっぱらってくれてたよね？

「……………」

「おい、おりむら！テメエなににらんでんだよ！」

「いたい！やめてよ！」

いちばんちかくにいるおとこのこが、わたしのかみをひっぱってききました。

いたい！だれか、たすけて！

「おい、お前等何やってんだよ」

「だれだよ、おまえはっ！」

きゅうにこえをかけてくるおとこのこがいました。

あ、あれ…あのおとこのこは。

「た、たばねちゃんのおにいさん…？」

「あーっ！おまえは、しののののあにじゃねえか！おまえ、すこしはしのののをどうにかしやがれ！」

「それに関してはずまない。だが、織斑を苛めるのは良くないと思うぞ？」

「うっせえ！おまえら、やっちまえ！」

おとこのこたちが、いつせいにたばねちゃんのおにいさんにむかっておそいかかってます。

たばねちゃんのおにいさんあぶない！

わたしは、ついめをつぶつてしまいました。けど…

「くくくくいつてええええくくくく！」「くくくく」

なんにんものおとこのこが、いたがるこえをききとじていたをひらきます。

そこには、しない（？）をかたてにもつてせなかをむけてたっているたばねちゃんのおにいさんがいました。

そのせなかが、わたしのちかくにいるはずなのにとおくかんじしました。

「さて、やるってんなら相手になるさ。どうする？」

「くっそ…おぼえてるよくくくくくく！」「」

そういいのこしてにげていくおとこのこたちを、ただにらみつけておいかえしてくれたたばねちゃんのおにいさんが、かっこよくみえました。

（たばねちゃんのおにいさん…うっん、しろっさんみたいにつよくなりたいな…）

「はぁ…大丈夫だったか、織斑？」

「う、うん…ありがとう、たばねさんのおにいさん」

「いや、別にいいさ。これからは気を付けるよ？」

そういつてはしっていくしろっさんのせなかを、わたしはずっとみつめてました。

「ふむ、それでどうしたんだい千冬^{ちふゆ}ちゃん？」

「あ、あの…わたしにけんどうをおしえてください！」

「剣道を？…それは、小学校に入ってからじゃないのかい？」

「たしかにそうです…でも！わたしは、はやくけんどうをならいたいんです！」

「……………いい目だね。判った。そこまでの覚悟があるなら、来週から教えるよ」

「ありがとうございます！！！」

すこしでもはやく、しろっさんのせなかにおいつけるようにがんばります！

第3話（前書き）

2話までで、既にお気に入り件数300件超え。PVも43/64
1アクセス…まさか、ここまで人気が出るとは…

第3話

千冬（織斑にそう呼べと言われた）の苛めが無くなり、2年が経った。

あの一件以来、千冬に対する苛めは見なくなった。そして、土日は柳韻さんから剣道を習うようになった。なんでも、あの時の俺を見て強くなりたい、と思ったのだと。俺には才能が無いんだがな…それで、俺に追いつきたいのか、月に一度俺と剣道の模擬戦を行なってる。正直、千冬の才能がはんば無い。いくら俺が才能無いからって、まさか同じ年の子に剣道で少し苦戦するとは思わなかった…

「さて、これで完成だ！」

俺が何をしてるのか？ただ、朝ご飯を作っただけだ。

本当なら、春香さんの役目なんだが…春香さんは、数週間前から病院にいる。別に病気や怪我をした訳じゃない。春香さんのお腹の中には、赤ん坊がいる。俺と束の弟、もしくは妹が産まれそうなんだ。そんな中、柳韻さんと束は料理が作れないので、俺が作ることになっている。

そう言えば、早ければ今日には産まれるって言っていたな。

束は、ずっと楽しみにしてたが、俺も楽しみだ。

そうそう、束と言えば、アイツは俺の料理をちゃんと食べてくれて

いる。

初めて食えるとき何て、嫌々食べてたのに食たときは笑顔でなってくれてる。初めて食べたとき、口にした瞬間に笑顔になってたのが印象的だったな。

しかも、「…ご飯に罪は無いから」なんて言いながら頬を赤くしてそっぽ向いて食べてたのは、可愛かったな。

千冬にも何度か作ったことはあったな。一口食べただけで、笑顔になってくれたのが嬉しかったな。そういえば「私も頑張らなきゃ」なんて言ってたけど何のことだ？

- - - ガチャ

「お？今日もおいしそうだね、士郎君」

「父さん。ああ、今日のも自信作だよ」

「はは、春香も可哀そうだな。士郎君のご飯を食べれないなんてな」「大丈夫だよ、父さん。母さんが元気になった後も、作るつもりだから」

「それなら、春香も安心だよ。あんなに悔しがってる春香を見るのは、始めてだったからな」

確かに、初めて作ったときは春香さんが食べれなくて悔しがってたからな。

- - - ガチャ

次に入ってきたのは、何時も通り不機嫌な顔をしてる束だ。

何故だろう、最近は束の足取りが今までよりも軽くなってる気がする。

「「おはよう、束」「

「……………おはよう」

束も席に着き、今はいない春香さんを除いた篠ノ之家が揃ったこと

だし、食べるとするか。

「いただきます」

「……………いただきます」

束もちゃんと俺が注意しなくても、「いただきます」を言うようになった。

俺からすれば、嬉しい限りだ。ちゃんと、食材への感謝を忘れずにいてくれるしな。

今日の朝食は、自作の食パンをスクランブルエッグにサラダという簡単なメニューだ。さすがに、朝からがつりした物は、料理人として食べさせる訳には行かないからな。
さて、俺も朝食を食べるとするか。

「「「ごちそうさま」」」

あれから、30分経ち俺たちは朝食を食べ終わった。

「今日もおいしかったよ、士郎君。これで一日、頑張れるよ!」

「ありがとう、父さん。束はどうだった？」

「……………べ、別においしくなんてなかった」

などと、束はそっぽ向きながら言ってるが終始笑顔で食べてたから別に評価を聞くまでじゃなかった。

やれやれ、束も素直じゃないな。

「それじゃ、父さん。俺たちは、小学校に行ってくるよ」

「ああ、いつてらっしい」

「……いつてきます」

「ただいま」

あれから数日たった。春香さんは、結局あの日の内に出産し、女の子が産まれた。

そして、今日妹の筈はずを連れて帰ってくる予定だが、俺は今日は忙しかった。緊急で生徒会のほうや先生方から修理する必要がある物を直してから、家へ帰宅する嵌めになったんだ。生徒会に所属してる俺の友達ともの柳洞一成りゅうどういっせいが申し訳なさそうにしてたな。つてあれ、何か家の中が騒がしいな？

（春香さん達が帰ってきたのか？）と思いながら、声がする居間の扉を開いた。

――ガチャ

「ほーきちゃーん」

――ガチャ

扉を閉めた。

何と言うか、色々といいたい事があった。束が、いつものローテーションと違いかなりのハイテンションだった。そう言えば、束の相手をしてた千冬が時々疲れたような表情をしてたのはこれが原因なのか？

そして、柳韻さんに春香さんはそれを笑顔で見つめてたし……なんと言うか、また一段と篠ノ之家が賑やかになりそうだな。

箒が生まれ、春香さんと共に篠ノ之家に来てから一週間が経った。あれからも、束の箒への熱は冷めることを知らなかった。千冬が、「今まで以上に騒々しくなった…」って愚痴っていた…すまん、千冬。今度俺が、何かデザートを作ってやるよ。

家族の仲で、一番箒の面倒を見てるのが束だ。次に、春香さんで柳韻さん、そして俺の順番だ。

ちなみに、俺が一番面倒を見てない理由は束にある。

俺が、箒の面倒を見ようとすると決まって邪魔してくる。…まったく、なんでさ？

そんなこんなで、篠ノ之家は予想通りに今まで以上に賑やかになっていた。俺は、この家族を守って行かなきゃな。

「士郎さん!!」

放課後の、それも殆どの生徒が帰っていったグラウンドに切羽詰った声が響いた。

いきなりの事で、急いで声のほうに振り向くと、そこには息を荒げている千冬がいた。

「千冬？ いったい、どうしたんだ？」

「束が…束が！」

「束が何かしたのか？ いったん、落ち着けて」

「落ち着けません！ 束が、大変なんです！」

千冬の焦りようから、束がかなり危険な事になっているがわかった。千冬は、普段はクールな分あまり驚いたり、焦ったりはしない。その千冬が、これほど焦ってるからな。

「束が、誘拐されたんです!!」

それは、俺が予想していた以上の最悪な現実だった。

第3話（後書き）

束が、士郎に対してツンデレ化している…だと！？
いったい、どうしてこうなった…

第4話（前書き）

色々やっちゃた感が否めない、第4話をどうぞ

第4話

それは、突然起こったことだった。

束と千冬が、久しぶりに公園に寄ったときに起こった。

黒い服に見を包み、見るからに暴力団やヤクザのような奴らが公園にたかっていたのだった。なので、直ぐに帰ったほうが言いと進言する千冬だったが、束はあんな奴等無視すればいいと言った。

千冬は、仕方なく束の意見を採用し公園に寄る事にしたのだった。だが、それがいけなかったのだろう。束も千冬も他の子供と比べれば可愛らしい容姿をしているのだ。そのての趣味の奴から見れば、放っておけないだろう。そして、黒服の奴等にはそのての趣味を持った奴もいたのだった。

しつこく話しかけてくる黒服に対し、千冬は徹底的に無視をし、束も無視をしているが少しずつ苛立っていた。そして、ついに苛立ちは限界に達しキレるのだった。

束の罵詈雑言に苛立ちを高めた黒服たちは、ついに束に暴行をくわえようと始める。だが、篠ノ之道場に行っている千冬が、木の棒を拾い迎撃するも子供対大人ではいくら剣の才能を持っている千冬でも、打ち勝つ事はできなかった。一人が千冬の相手をする間、残ったメンバーは束を同じく黒い車に連れ込んでしまった。千冬もこ

のままではいけないと思い、心の中で束に謝罪をしその場を離れ、誰か頼れる人に伝える事にしたのだった。

千冬が頼れそうな人がいそうな場所は束の家か学校のどちらかだ。そして、公園から最も近いのは学校だ。そこには、いるのかも分からない。でも、もしいるのならかなりの時間短縮にもなるだろう。だが、もしいかなかったら…そんな事を考えながら、千冬は走った。そして、学校で…千冬が頼れる男、士郎を見つけるのだった。

s i d e o u t

s i d e 士郎

俺は走る。魔術の秘匿など気にせず、強化の魔術を最大限に使い千冬から聞いた特徴の車を探すのだった。

一刻も早く、束を助けるために。俺は、この平和な世界で何処か油断をしていたのだろう。

こんなに平和なら、きっと大丈夫。そう、考え込んでしまったのだろう。

くそっ！俺の失態だ！だから、絶対に俺が束を助けるんだ！

千冬には、柳韻さんたちに伝えるように頼んである。そうすれば、きっと柳韻さんたちが警察に連絡してくれるだろう。

ここから約3kmくらい離れた所だろうか、そこに黒塗りの車が海の方へ向かって行くのが見えた。

（あの車か！）

千冬から聞いた特徴通りの車を発見し、見失わないようについて行く。

くそっ…此処が人前じゃなかったら黒鍵や弓で車の足を止める事は出来るんだが…だが、そんなIfを考えてもしょうがないか…そう考えていると、目の前の車は海に近くの倉庫に止まっていた。

…なるほど、ここが奴等の本拠地か？

まだ俺と倉庫まで距離がある…くっ、無事でいてくれ束！

side out

束が眼を覚ますと、そこは何処かの倉庫のようだった。

眼が覚めたばかりであり頭が回らないで何が起きているのか思い出していると、自分が黒服の男たちに攫われ、何かの薬品で眠らされたことを思い出す。

束は、何とか此処から抜け出そうと試みるも、両腕と両足がロープで縛られている事にやっと気付いた。

「やっと眼が覚めたか？」

「…私に何するつもり？放してよ！」

「断る。貴様には、身代金をたっぷり貰うために犠牲になってもらう」

束が黒服たちのリーダーらしき男に抗議をするが、軽く流されてしまう。

捕らわれている中、束は考えてしまう。もしこのまま帰れなかったら…千冬や父親、母親に会うことができなくなったら…妹の篤と会えなくなったら…そして、大抵誘拐されればその子は殺されてしまう…

（ヤダ…ちーちゃん達と会えなくなるなんて…このまま、死んじやうなんてヤダ！）

「……………けて……………」

「あ？」

「たすけて…！」

「かつはは、助けなんてこねえよ」

束の呟きは、大きくなる事に力強い声となっていく。

そして、束の頭の中には、何故かいつも自分のことを心配してくれていて、そして自分が嫉妬して憎んでいる兄の顔が浮かんだ。束自身、何故真っ先に束の顔が浮かんだか判らない。

だが、束は束ならばきつと助けに来てくれる、そう思ったのだった。

「たすけて…束…！」

――パリン！パリンパリン！

「な、なんだ！？」

束が叫ぶと同時に、倉庫のガラスが何枚も割れると同時に何本かの黒鍵が入り込んできた。そして一拍空けて、人影が入り込んできた。謎の人影は、赤い外装のような服を見に纏い、黒と白の短剣を持っていた。

「フツ…お前の望み通り、助けに来たぞ。束」

「し…ろっ…？」

「て、デメエ何者だ！」

入り込んできた人影は、前世の頃正義の味方として戦場を駆け抜けた相棒とも言える双剣の干将・莫耶を持ち、自身の対魔力の低さを補うために着込んでいた聖骸布を身に纏った篠ノ之 束であった。束は、リーダーと思わしき男の発言を無視し、強化した足で近くにいた黒服に近づき柄を黒服の鳩尾に叩き込んだ。

「ガフツ!!」

黒服は予想外の痛みに、気絶してしまう。士郎は、それだけで止まる事は無く、そのまま干将・莫耶（刃を潰してある）で、近くの黒服たちを切り裂き始める。

もちろん、刃は潰してあるので死ぬ事は無いが切り裂かれた黒服たちは、気絶していく。

「なっ!?! こんな餓鬼に… テメエら! 袋叩きにしてやれ!」

「「「オオオオオオオオオオ!!」」」

ブロックン・ファンタズム

「フツ… 壊れた幻想」

「「「「なあああああ!!?!」」」」

急に、さっきまで刺さっていた黒鍵が小規模の爆発を起こした。

それにより、黒鍵の近くにいた黒服はその足を止めてしまう。士郎にとつて、一瞬でも足が止まれば充分だった。

士郎は、足を止めず近づいてきた黒服に干将・莫耶を投げつけ、爆発させた。

黒服たちは、いきなり爆発した双剣に驚きながらも気絶してしまう。残った黒服たちも、士郎の行動に警戒をし動く事が出来なくなっていた。

「何してやがる! 餓鬼はもう何も持つてすらいねえんだぞ!」

「「「「は、はい!」」」」

残った4人の黒服たちが襲い掛かってくる。

だが、士郎もそのまま手ぶらでいるつもりも無かった。

トレース・オン
「投影開始。くらえ!」

「なん… だとお!?!」

「えっ…!？」

士郎は、投げたはずの干将・莫耶を再び投影した。それにより、士郎以外は投げて爆発したはずの武器が再び士郎の手に戻っていたことに驚いた。

「驚いてる暇があるのかな？」

「な、何も無い所から剣を…化け物だあああ！」

「…に、逃げろおお」

士郎の魔術を知らない残った黒服たちは、士郎の魔術に恐れ逃げてしまった。

これで、残ったのは士郎と黒服のリーダー、そして束だけだった。

「さて、どうするかね？残ったのはお前だけだぞ？」

「くっ…だが、こっちには人質がいるんだぞ！」

「…きやつ」

「束！ くっ、束に手を出すな！」

黒服のリーダーは、束にナイフを向け始める。

束を人質にされ、士郎は身動き取れなくなってしまった。士郎の目的は、束を無事に救い出す事だ。そのため、束に傷一つ付けさせる訳にはいかなかった。

「かつはは。なら、その剣を捨てるんだな」

「くっ…」

士郎は、言われた通りに干将・莫耶を投げ捨てた。

「士郎！ なんで…」

「フツ…そう言えば、お前が俺の名前を言うのは初めてだな」

「士郎…」

「ハッ、なぐに人前でイチャついてんだあ。まあいい、これでダメも終いだ！」

傍から見れば、士郎と束はあまり似てない為一目見ただけでは兄妹と見抜けないだろう。

黒服のリーダーが取り出したのは、拳銃だった。

照準を士郎にあわせ、いつでも撃てるようにしている。

「さあ、糞餓鬼。この嬢ちゃんに別れでも告げな」

「悪いが、その必要は無い」

「なんだと！？」

「フツ！」

「…キーン！キーン！」

「がつ！？な、なんだ」

突然、男の持っていた拳銃とナイフが何かに弾かれた。

拳銃とナイフを弾いた何かは、そのまま音をたてながら地面に落ちる。ナイフを弾かれた事で、黒服のリーダーは束の拘束を解いてしまった。

黒服のリーダーは、その何かを確認し驚愕する。

「なっ！？こ、コインだと！？」

そう、拳銃とナイフを弾いたのはゲームセンター等でありそうなコインだった。

これは、羅漢銭と呼ばれる暗器の一種で平たく言えば銭投げである。士郎は、相手が油断している内に少しでも空けておいた手の中に2枚のコインを投影し、相手の拳銃とナイフに飛ばしたのだった。

「驚くのはいいが、油断のし過ぎだ！」
「ガッ！」

自分の切り札である銃と人質が、たかだかコイン2枚で防がれた事に驚く事しかできなかった。
士郎は、その隙に黒服のリーダーに向かって回し蹴りを放ち、黒服のリーダーはその蹴りにより気絶してしまった。

「ふう……………大丈夫だったか、束？」
「え、あ……………うん……」
「それじゃ、帰ろう。俺たちの家に」

拘束から解放され、座り込んでしまっている束に手を差し伸べる士郎。
束は、戸惑いながらも差し伸べられた手を握るが、一向に立ち上がる事をしない。

「？ どうした」
「……………た」
「へ？」
「……………腰が抜けて……………立てないの／＼／」

いくら束が、他の子供と違い大人びた思考を持っていたても、さすがに自分が誘拐され人質にされれば、その恐怖で腰が抜けるのも当然だろう。
顔を真っ赤にしながら、恥ずかしそうに言う束を見て、士郎は笑いながら背を向けてしゃがむ。

「ほら」

「？」

「おんぶしてやるから。乗れよ」

「うん／＼／」

士郎は、束をおんぶしそのまま工場を後にするのだった。

ちなみにだが、黒服たちは士郎たちが去った後に警察たちに逮捕され、壊滅したそうだった。

束を助け出し、帰宅する二人。その姿は、仲の良い兄妹にしか見えなかった。

束は、士郎に背負われながらひとつだけ士郎に尋ねた。

「ねえ……」

「ん？ どうした」

「なんで……私のこと、助けに来てくれたの？」

「………なんでさ……妹を助けようと思わない兄がいると思うか？」

「でも！ 私は、お父さんたちがずっと士郎のこと構ってるから、お父さんたちは私のことはどうでもよくて……士郎だけは居ればいいのか、って思ってた……それで、士郎のことずっと……嫉妬して、無視して、いないものだと思って接してたら……」

「……だから束は俺のこと無視してたのか……それでもだよ、束。俺は束のことを家族だと考えてる。それに、俺にはなりたいたいものがあるんだ」

「なりたいたい……もの？」

「そう。正義の味方さ」

いままで笑顔を見せても、それは苦笑だったり作り物のような笑顔をみしていた士郎。だが、このときの笑顔は自分の本当の笑顔を束に見せていた。

それを見て束は、恥ずかしさから顔を士郎の背中に埋めて見えないようにした。

「それにな、束。子供のことをどうでもいい、なんて思う親なんていないさ。いたとしても、父さんたちはそんな人じゃない。だから安心しろ」

「……今日は疲れただろ？家に着いたら起こしてやるか、今は少し寝てろ。」

（うん。そうさせてもらっね、士郎…今日は助けてくれてありがとう、お兄ちゃん）

束は、幸せそうな顔で眠るのだった。

第4話（後書き）

これで、篠ノ乃家の仲をよくする事が出来ました。

原作では、束は両親のことを”身内”程度にしか捉えていませんでしたがこの小説ではちゃんと”両親”として捉えています。

第5話（前書き）

やっちゃった感がある話しパート2です。

第5話

side 東

「……ね」

夢。夢を見ている。誘拐された私を、たった一人で助けに来てくれたお兄ちゃんの夢。

「…ばね」

どこからとも無く剣を取り出し、子供とは思えない力で誘拐犯たちを退治していく正義の味方。私は、ヒーロー物は子供っぽくて好きじゃなかったけど、こんなかつこいい正義の味方なら大好きだ。

「た…ね!」

でも、もし今見てる夢が現実じゃ無くて夢だったら？

私はそれが怖くて、夢のまどろみの仲から抜け出せない。夢だったら、このまま夢の世界にいてもいいよね？私とお父さんとお母さんと篤ちゃんにちーちゃん…それに、お兄ちゃん。皆仲良く笑ってられる世界にいても…

「束！」

「わっ！？」

「やっと起きたか…おはよう、いやこんばんわだな束」

「あ……うん。おは……こんばんわ、お兄ちゃん！」

眼を覚ますと、私はお兄ちゃんの背中では寝ていました。

そっか、さっきまでの夢じゃなくて本当にあったことだったんだ…

「家に着いたぞ、束」

「あ、起こしてくれる約束だったね、ありがとう！お兄ちゃん」

「別に構わないさ。そうそう、ちゃんと父さんたちにさっきのこと話すんだぞ？」

「えっ！？どうして？」

「でなきゃ、根本的に変わらないだろ？父さんたちならきつと大丈夫だ」

「…うん！」

「さ、入るぞ」

私をおんぶしたまま、お兄ちゃんが玄関の扉を開く。

そっいえば、さっきから私は降りてないなあ…ま、いつか！

「…ただいま」

「…ガタガタガタ！」

「束！！大丈夫だったか（の）！？」

家に入ると、お父さんとお母さんが走ってきました。

お父さんたちの眼は、真っ赤に充血していて…さっきまで泣いていたのが判ります。

お兄ちゃんは、私を降ろしてくれました。

降ろされた私を、お父さんとお母さんが抱きしめてくれます。…あ
ったかい、これが…家族の愛情、なんだね。

「お父さん…お母さん…」

「どうしたんだ、東？もしかして何処か怪我でもしたのか！？」

「…ただいま！」

「ッ！おかえり、東え〜！」

お父さん達の前でも、ずっと不機嫌そうな顔しかしてなかったけど…
…たぶん、私は笑えてると思う。

お父さんも、お母さんも…私にとって『身内』なんかじゃなくて『
両親』なんだから！

それから、私は今まで思っていたことを全部話した。そしたら、お
父さんにもお母さんにも泣きながら謝られました。お父さん達に強
く抱きしめられながら、私も泣いてしまいました。

s i d e o u t

泣いてしまった柳韻、春香、東が落ち着いてから土郎たちは居間に
行くことにした。

すると、そこには千冬がテーブルに身体を預け眠っていた。

柳韻が言うには、土郎と東が心配で篠ノ之家で待っていたそうだ。
さすがにこのままにしておくのもまずいと思い、土郎は千冬を起こ
すことにした。

「千冬…起きろ、千冬！」

「ん…んゝ、しろつさん？」

まだ寝ぼけているようだが、千冬は起きたようだ。もちろん、ちゃんと頭が働くとここに士郎と束がいることに安堵し、泣いてしまっていた。

「にしても、束も士郎君も無事でよかったよ」

「あのねあのね！お兄ちゃんが、どこからともなく剣を出して私を助けてくれたんだよ！」

「剣を？束、夢を見てたんじゃないの？」

「違うよー！本当に出してたんだよー」

束は、簡単にさっきの戦いの事を話しているが、士郎は内心冷や汗をかいていた。

この世界が、士郎が前いた世界とは違う平行世界なのは日本に冬木市が無かった事で気付いた。だが、この世界にも魔術があるかどうかは判らない。最悪、魔術協会が存在し前世と同じように代行者たちに終われてしまう可能性だって無くは無いのだ。

「そ、そうだ束。お前は、寝てたから夢でも見てたんじゃないのか？」

「むー、お兄ちゃんまで…けど、甘いね！束さんにはこの小型カメラがあるからさっきの一部始終は録画済なんだよ！」

終わった…、内心士郎はそう思っていた。

柳韻は、士郎がどう助けたのか気になっており、率先してカメラをテレビのビデオに繋げていた。

士郎は、何とか止めようとするが舂香に羽交い絞めされて動けなかった。

そして、千冬は眼を輝かせながら待っていた。千冬にとって士郎は憧れであり、目標でもある。そのため、士郎の本気を一度は見ておきたかったのだ。

「ちょ！ま、待ってくれ！」

「それじゃ、さいせ〜」

士郎が止めるのも虚しく、束が録画した動画を再生されてしまった。それから、数十分後…

「これはこれは…」

「本当に剣を出してるわね…」

「すごい…」

束が再生した動画を見た3人は、現実とも思えない映像に呆然としていた。

それもそうだろう、いきなり人の手から剣が出現すれば啞然とするだろう。

士郎は、さすがにもう隠しきれないだろうと思い、せめて何とかできなにか考えていた。

「…士郎くん、さっきのは何だったか聞いてもいいかい？」

「…それじゃあ一つだけ、条件があります」

「なんだい？」

「父さんたちが、俺と束に隠してる事を言ってくれば話します」

「…ッ!？」

「お父さんとお母さんが、私たちに隠してる事？」

士郎にとって、これがうまくいけば話さなくてすむと考えている。だが、それと同時に柳韻たちが隠してる事は聞いては、後戻りできなくなるのではとも考えてしまっていた。

「…そうだね、いつかは士郎くんたちに言わなくては、と思ってた

よ」

「柳韻さん!？」

「春香…いつかは言わなければいけないことなんだ。それが、今になっただけだよ」

「…わかったわ」

「あ、あの…」

柳韻と春香は、互いに秘密にした事を話す覚悟をし終わると、千冬がひそひそを手を上げ始めた。

「私は…いない方がいいですよね？」

「いや、千冬もいてくれ。その方が、俺のことも話し易い」

「はい、わかりました。士郎さん」

「じゃあ、話してくれ。父さん」

士郎も話す覚悟をし、柳韻が秘密にしていた事を聞く事にするのだった。

柳韻は、いつになく真剣な眼で士郎たちを見る。

「そうだな…まずは、どこから話すか。……………うん、率直に言っよ。」

士郎君、君は束の兄じゃないんだ」

「「えっ!？」」

「やつぱり…ですか」

「あら!？士郎くんは知ってたの!？」

「ええ。なんとなくですは、束を呼び捨てにして俺だけ『君』付けですし。何より、束に比べると甘やかせ過ぎてる感じがしましたから…なんとなくは」

「そうか…士郎くん、君はね。束が産まれた数日後の病院の前に捨てられていたんだ」

「それを柳韻さんが見つけてね。そのまま私たちが引き取る事にし

たの」

「双子って言ってたのも、医師の判断では束と同じ日に生まれ、同じ年だったからなんだよ」

「これが、僕たちが二人に隠していた事だ」

「私たちにとつて、士郎くんは私たちの本当の子じゃないから…本当の家族になれるように、士郎くんを甘やかしてたの。…でも、それで束のことを疎かにしちゃうなんて…駄目な親ね、私たちは…」

柳韻と春香から語られる、士郎と束が本当の兄妹ではないと言う事実。

まだ幼い束と千冬には、衝撃的な事実だった。

「…次は、俺の番ですね。俺は…前世の記憶を持った魔術使いです」

そして、士郎も柳韻と春香が全てを語ってくれたようにすべてを話すことにした。

衛宮 えみや 士郎として始まった、あの大火災のこと。自分を引き取ってくれた衛宮 きりつぐ 切嗣のこと。自分が巻き込まれた聖杯戦争のこと。そして…正義の味方として世界を回り、代行者に殺されたこと。その全てを話すのだった。

「…これが、俺という存在なんです」

話し終わると、士郎を除く全員が俯いていた。士郎は、当然だろう、と考えていた。

まさかいきなり、自分は一度死んで生き返った魔法使いです、なんて言っていたんだ。しかも、その後の話が妙にリアルで暗い話である。こうなるのは、当たり前だろう。

士郎は、急に立ち上がり居間から出ておこうとする。

「…どこに行くんだい、士郎くん」

「……この家を出てきます。俺は…この家の家族では、ありませんから」

士郎の言葉に息を呑む束と千冬。春香は、ただ何も喋らずに泣いているだけだった。

士郎がドアノブに手をかけた瞬間、士郎の身体は吹き飛んだ。

そう、柳韻が全力の力で士郎を殴り飛ばしたのだった。

「俺はこの家の家族じゃない？」

ふざけた事を言うな！君は！士郎くんは！僕たちの家族である、篠ノ之 士郎だ！！」

「…だけど、俺は…」

「士郎くん…あなたにとって、切嗣さんは本当の家族なんですよ？」

「…はい。俺は…じいさんの事を、家族だと思ってます…」

「だったら問題ないわ。士郎くん…血が繋がってるか、なんて関係ないの。」

士郎くんが切嗣さんを家族と思ったように、私たちとも…家族になりましょ」

「でも…」

「でもも、なんでもない！君は、僕たち篠ノ之家の一員だよ。士郎（・・・）」

「ッ！ ありがとう、父さん。母さん…」

その日、士郎は泣いてた。

あの大火災がってから、一度もないたことのない士郎。今までは、心が壊れロボットが人間の振りをしているようだと思われるようなだったが…まぎれもなく、壊れていた心の一部が治った瞬間であった。

* * *

「で、何で俺の布団で寝てるんだよ、二人は…」

「だって…こうでもしないと、お兄ちゃんがどっか行っちゃうんじゃないかって思ったんだもん」

「わ、私は…束に連れられて…」

あれから、千冬はさすがに遅くなったのでこのまま篠ノ之家に泊まることになった。

束と一緒に風呂に入ってる間に、春香が布団などの準備をしていた。

士郎は、あの後柳韻に連れられ刀を投影させられていた。

剣術家でもある柳韻に、士郎の投影魔術による真剣に惹かれて色々と見せて欲しいと頼まれていたのだった。

それも終わり、お風呂から出た士郎は自分の部屋にいくと、何故か束と千冬が士郎の布団で寝ているのだった。

束とは、さすがに小学生になってからは別室になっているし、千冬もいるのでさすがにツツコミを入れるのだった。

それに、今回の事はさすがに自分に非があるので、却下もできなかった。

さすがに、同じ布団で寝るのは厳しいので、もう一組布団を持ってきて士郎を中心に3人は眠るのだった。

……その後、中学に入っても束は士郎の布団に入り込んできて、千冬が泊まる時は士郎も一緒になるとは知らずに。

第5話（後書き）

これで、幼少期辺は終了です。
いよいよ中学パート！やっとIS関連の話に入ってきました。

第6話（前書き）

何故か、『正義を受け継ぎし者』よりもコッチのほうを考え付いて
しまう…

そして、早く原作に入りたいです…

第6話

「うにゅ…すやすや…」

耳元から、聞きなれた声が聞こえ、意識が覚醒する。やれやれ…またなのか？

中学生になった俺は、身体を起こすと同時に、二人分くらいに膨らんでいる布団の中を見ると、予想通りの人物がその中にいた。

「はあ…なんでさ？」

中で寝ていたのは、ふわふわとしたファンシーなパジャマを見に纏い、俺に抱きついてきている束だった。抱きついてるせいで、束の中学生にしては豊満な胸が俺に密着してるが何時ものことなので、とりあえず無視しておく。

「起きる束。もう朝だぞ？」

「ん…おはよー、お兄ちゃん」

「まったく…一体何時の間に忍び込んだんだ？寝てるとはいえ、気配を感じなかったぞ？」

束は、俺を『兄』として認めてくれた日以来、よく俺と寝ている。さすがに、中学生になってからは止めようとしているが、今日みに忍び込んでくる日がしばしばある。

始めの頃は、束が近づいてくれば気配で起きたのだが、最近になつては束の隠密スキルが上がったせい、起きるまで気付かない事がある。

「ふっふっふ…今回はこれ！束さん特製の『気配を消せる君3号』を使ったのだよ！これで、お兄ちゃんが寝ちゃった後に入り込んだんだー♪」

束が取り出したのは、首にかけていた小さなペンダントだった。つてか、そんな物で俺が気付かないほどに気配が消せるつて…束は、どんだけ天才なんだよ…

ちなみに、何故あのペンダントが3号かというと…今まで束が俺に使ってきて、ペンダント型は1、2号は俺が気付いた為、改良を加えたていったらしい。なので、3台目なので3号らしい。

「はあ…仕方ない。早く着替えて、父さんたちのところに行くぞ」
「えー、お兄ちゃん連れてってー」
「ったく…仕方ない」

束は、実は結構頑固な面があり、一度決めた事はなかなか折れてくれない。さらに、飽きやすいからなおたちが悪いのは、ここ数年でよく理解している。
なので、無駄な抵抗はせずに束の眼の前で、しゃがんでやる。

「ありがと！さすが、お兄ちゃん、こんなに優しい義兄がいて束さんは嬉しいよ」
「はいはい。とりあえず、束の部屋まで送ってやるよ」

束を背に乗せて、束の部屋まで歩き出す。部屋まで送った後は、また部屋に戻って着替えをしてから、下の部屋のリビングに向かう。
リビングにつくと、既に父さんと母さん、束、箒が席に着いていた。どうやら、俺を待ってたみたいだな。

「おはよう、皆」
「「おはよう士郎（くん）」」
「おっはよー！お兄ちゃん」
「おはよう、おにいちゃん」

挨拶が終わってからは、皆で談笑しながら朝食を取る。これが、篠ノ之家の朝だ。

「ピンポン」

朝食を食べ終わり、身だしなみを整えていると家のチャイムが鳴る。
ああ、もうそんな時間か…

「束。箒、行くぞ」

「うん。それじゃ、いこー」

「はい。おにいちゃん！」

「お早うございます、土郎さん。おはよう、束。それに箒」

「おはよー、ほうき！しろう！たばねさん！」

玄関には、何時も通り千冬とその弟の一夏^{いちか}が立っていた。ちなみに、一夏が俺のことを呼び捨てなのは、俺がそう頼んだからだ。

一夏も家の門下生で、父さんから剣道を教わっている。

「それじゃ、行くとしますか」

「「はい」「うん！」」

俺と束、千冬が通う中学はちょうど前に通っていた小学校の前を通る。箒と一夏は、俺たちが通っていた小学校に通っているので、登校時は小学校の前まで一緒だ。

箒は一度、あの小学校でイジメられていたことがある。箒は、俺たちに迷惑をかけたくないから、と言ってずっと黙っていた。それを救ったのが、一夏だった。それ以降、一夏と箒の仲は進展していたのだ。

つと、もう小学校の校門前についたか。

「それじゃ、頑張つて行つて来いよ、二人とも」

「一夏。あんまり箒に迷惑かけるなよ？」

「行ってくるねー、篝ちゃん」

「「いつてきまーす！」」

二人と別れ、俺たちも中学校に向かって歩き始める。

「そういえば、土郎さんは今日は弓道部のほうに行くんですね？」

「ああ。さすがに、幽霊部員になる訳には行かないからな」

「東さんは、それを見学するんだよー」

この会話通り、俺は弓道部に入部している。前世の頃、弓道部だった名残かいつい入ってしまった。…もつとも、学校の備品の修理などをこなしているせいか、最近は顔出し忘れていたな。

ちなみに、千冬は剣道部で東は帰宅部だ。千冬の剣道の腕前は、最近では俺をも超え、向かうとこ敵なしの状態だ。…この前、剣道の全国大会を圧倒的な実力で優勝してたしな…

「でしたら、一緒に帰りませんか？」

「そうだな。弓道部と剣道部は、何故か終了する時刻が同じだしな」
「もちろん、東さんも一緒だよ！」

そんな会話を繰り返していたら、中学校に着いてしまった。

この中で、千冬と東は一緒のクラスだが俺だけは別のクラスだ。…前、その事に文句を言っていた東が学校のパソコン内にハッキングしてデータを書き換えようとしてたっけな…

「それじゃ、また後でな、二人とも」

「はい。それでは、また後で」

「お昼になったら行くからねー、お兄ちゃん」

東と千冬と別れると、不意に殺気を感じ、俺は走り出した。

「……待てえ、篠ノ之……!」
「だあゝもう、またかよ……!」

実は、束と千冬はこの学校のアイドル的な存在でもある。…二人とも美人なせいで、その中にいる俺をよく男子が追いかけて来るんだよな…基本的に、束たちと一緒にいるときは襲ってこないけど、別れた瞬間に襲い掛かってくるから性質が悪いんだよな…
逃げ回っていると、ようやくチャイムが鳴る。

「……チツ…また逃したか……」

襲ってくる男子達は、チャイムが鳴ると大急ぎで教室に戻る。男子達は、束たちと同じクラスの連中が多く、さらにクラス委員長は千冬だ。千冬は、遅刻してくる連中には容赦なく竹刀を打ち込んでくるからなあ…そのおかげだ。

「ふう…やっと落ち着けた」

「やれやれ、今日も追われてたのか士郎？」

「ああ、一成。まあ、もう慣れちゃったからな…」

朝っぱらからの全力疾走により、疲れて机に体を預けていると俺のクラスメイトの一成が声をかけてくる。

「まったく、あの女兎に女虎め…士郎にここまで苦勞をかけるとは」
「はは…別に、束たちの性じゃ無いさ」

一成の言う、女兎と女虎は束と千冬のことだ。兎は束のことで、最近は自家製のうさ耳の力チューシャを付けているからだと思う。それで、女虎とは千冬のこと、千冬は学校では孤高というか何と言

うか…誇りの高い虎とかのイメージが強いらしいからだと言っていた。

一成と束たちははっきり言って仲が悪い。前世で言うと、一成（前世の時の）と遠坂くらいだ。さて、授業が始まる時間だ。

* * *

「お昼に来たよ、お兄ちゃん！」
「五月蠅いぞ、束」

昼休みに、束と千冬が俺のクラスにやってきた。それと同時に、クラスの雰囲気が変わった気がする…

「ほお…また来たのか、女兎に女虎」

「はあ？また君かい？束さんは、お兄ちゃんとお昼を食べに来たんだよ？少しは空気を読んだらどうなの、KY？まったく…これだから、KYは困るよ」

「まったくだな。今回だけは、同意するぞ束…私たちは、土郎さんとともに昼食をとり到此処にきている。貴様に用があるわけではないぞ、柳洞」

互いに牽制しあっているこの状況…一体、どうすればいいんだ？始まりは、束が誘拐された次の日からだ。

束と一緒に帰ろうと言われたが、ちょうど一成とも一緒に帰ろうとも言われていた。

それを知った束は、一成に文句を言い、一成も一成で言い返し始めて…後は、売り言葉に買い言葉。途中から、千冬も加わり今みたいな関係になったんだ。

俺としては、仲良くしてほしいんだがな…

それから、俺と束、千冬、一成で昼食を食べたのだが…雰囲気は、相変わらず悪いままだった。

* * *

放課後、俺と束は弓道部に顔を出している。

俺が弓道部に行くときは、毎回束が見学しに来る。

時々、束が俺を真似て弓道衣を着る事もあるけどな…

さて、そろそろ俺も射るか。

的の前に立ち、俺は矢を持ち弦と共に引つ張り、狙いを定め放つ。矢はそのまま真っ直ぐ飛んでいき、的の中心に当たる。もちろん、残心は忘れずに行なう。

「…………ふう」

「……パチパチパチ!!!」

「さっすがお兄ちゃん! カッコイイよ!」

「はは、社交辞令でもありがとな、束」

毎度ながら、何故か俺が矢を放つところ拍手されるんだよね…なんですか?

そして、束も毎回俺に抱きついてくるし。

「ふっふっふ、解らないか我が弓道部のエース篠ノ之君よ」

「部長?」

「君の射法八節は、全て上級者を越えている。いや、プロでもここまでうまい者はそう多くないだろうな。そんな君の射を見て、なんとも思わない者がいると思うか?」

「ふふん、私のお兄ちゃんだもん。当然だよ!」

俺たちの前に立って来たこの人は、弓道部の部長だ。

腕前は、いい方で全国に通じるレベルでもある。ちなみに言うと、俺の射を社交辞令とはいえ褒めてくれるおかげか、束の評価は周りの人と比べると高いんだ。

「やはり、その射の秘訣は集中力か？確かに、篠ノ之君の集中力は周りの部員や私と比べると高過ぎる…だが、それだけがあの射の秘訣とはいい切れない…では、いったい何故…」

「あ…皆？部長はこうなると長いから、気にせず続けてくれ。俺は今のうちに、的を張つとくから」

『ありがとよ（ね）、篠ノ之一（君）』

* * *

あれから、俺はずつと的を張っていた。その際に、束も付き合ってくれたから助かった。

束は、頭がいいだけでなく手先も器用な分、こういった事が得意だった。…ただ、途中で的をメカニックにしようとしなくてくれ…

「士郎さん？どうかしたんですか」

「ああ、千冬。大丈夫だ。ただの考え事だ」

既に、弓道部の部活が終わり帰路についている。

束がスキップしながら先行し、その後ろを俺と千冬が付いて行っている。

「あつ！そつだそつだ、お兄ちゃん！ちーちゃん！」

不意に、束がスキップするのをやめてこっちに振り返ってくる。その顔は、普段見せる笑顔とは違い真剣な顔をしていた。

「二人に…ううん、みんなに見て欲しいものがあるんだ」

何か、嫌な気がしてきたな…

第6話（後書き）

アンケートを取りたいのですが、士郎はESに乗れたほうがいいでしょうか？

物語として、士郎は基本乗らずに戦うイメージが高かったのですね。忘れてたので、皆様から意見を聞きたいのでおねがいします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8449x/>

篠ノ之家の長男は正義の味方

2011年12月15日23時32分発行